

どう変わる？

どう備える？

5年後の 英語教育



第 ③ 回

授業と評価の整合性を図り、 テストのレパトリーを増やす

英語の4技能を育む授業に転換したのであれば、テストも変えて、授業で学んだことの到達状況をきちんと測れる出題にしなければならない。単に成績をつけるためだけでなく、その後の生徒の学習や教員の授業改善にも生かせるテストとするためにはどうすればよいか、根岸先生に聞いた。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授 **根岸雅史**

ねぎし・まさし◎東京外国語大学卒業後、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、レディング大学大学院言語学研究科修士課程修了。レディング大学より博士号取得。専門は英語教育学、言語テスト、言語能力評価枠組み。公立高校講師、東京外国語大学助手などを経て、現職。主な著書に『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』（共著、大修館書店）など。

成績をつけるための テストになっていないか？

指導目標、授業、評価には整合性が必要であり、この3つを一体的に捉えて指導計画を立てなければならないのですが、ずれていることが多いのが実情です。よくあるのが、授業ではペアで英会話をしたり、英語で自己紹介をしたりしていても、スピーキングのテストをしていないというケースです。また、テストをしても成績に反映させるだけで、その後の指導や授業の改善につなげていないケースも見られます。

テストには大きく、定期考査など教員が作問して評価するテストと、より大規模な外部テスト（英語ではGTEC for STUDENTS*や英検など）があります。いずれも、学力が指導目標に到達しているかどうかを測ると同時に、到達していなかった部分に目を向けて、それができるように次の手立てを考え、学力向上につなげる必要があります。

外部テストでは、例えばGTEC for STUDENTSの場合には、4技能別の

到達度とともにレベルアップのポイントをアドバイスした帳票が、受検者一人ひとりに返却されます。何ができて、何ができていないのか。つまづいているのはなぜか。結果を分析して自身の課題を把握し、次の学習に生かすよう、子どもに働きかけることが大切なのです。

そして、教員自身も、学級・学年・学校単位でテストの結果を分析して、指導改善に役立ててこそ、テストを行う意義があると言えるでしょう。

教科書と同じ英文の出題 では、到達度は測れない

授業で学んだことを適切に評価し、その後の改善に生かすためには、テストの出題内容が重要になりますが、ここにも課題が見られます。

1つめの課題は、授業内容のチェックテストになっているケースです。例えば、読解力を測ろうとしているのに、教科書の英文をそのまま出題しているテストがまだまだ多く見られます。授業で読んでいるので、英文を理解しなくても、内容を覚えていれば解答できてしまいます。

テストには、「内容準拠アプローチ」と「目標準拠アプローチ」という2つの考え方があります。前者は、教えた内容そのものを理解しているかどうか確認するテストで、この場合は、授業で扱った教材をそのままテストに出しています。一方、後者は、到達目標に即したテストで、授業で扱った教材をそのままテストに使用することはありません。

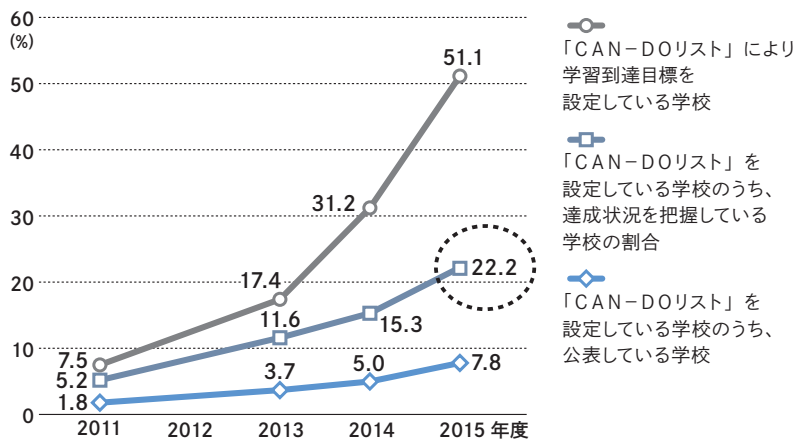
英語のテストでは内容理解よりも能力を測りたいわけですから、目標準拠アプローチのテストの方が適切だと言えます。定期考査では高得点でも、外部テストでは思わしくないケースをよく見かけますが、これは内容準拠アプローチのテストの影響だと考えられます。内申点が高いと受験では有利ですが、使える英語力が身につけているとは限りません。

ただ、授業にあまり立脚していないテストでは、動機づけが弱くなり、子どもが授業をおろそかにする懸念もあります。授業に準じていながらも、教科書そのものは出題しないというバランスが必要になります。

2つめの課題は、測りたい力が明

*ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」の3技能を測る。さらに、「Speaking（話す）」をオプション受検することで、4技能を測ることも可能。

図 「CAN-DO リスト」による学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握 (中学校)



* 2012年度は調査を実施していない。2011年度の数値は『『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査』の結果に基づく。
出典/文部科学省「平成27年度 英語教育実施状況調査」

確に測れる出題になっていないことです。先日、教員研修の講師を務めた際、参加者に自身の定期考査の問題を持参してもらったところ、総合問題がかなり多く出されていることが分かりました。1つの問題に語彙、文法、内容把握など様々な要素が含まれていると、何ができていて、何ができていないかが分かりにくくなります。定期考査には出題範囲があり、測定すべき知識や技能が明確ですから、到達度を適切に把握し、振り返りに生かすためには、テストング・ポイントが明確なテストを出題する方が望ましいと言えます。

多くのテスト方法に触れる研修を行う

授業や教科書が変わったように、テストも変えていく。そして、指導目標、授業、評価の一体化を図るためには、教員にその必要性を理解してもらうとともに、教員のテスト技術を高めることも大切になります。

例えば、スピーキングテストの実施率は、中学校では以前より増えていますが、ALTに任せきりだったり、教科書の暗唱になっていたりする場合もあるようです。その背景には、教員に出題形式のレポーター

が少ないことが挙げられます。リスニングやリーディングのテストは教員自身が数多く受けていますが、スピーキングのテストは英検の面接(インタビューテスト)くらいしか経験がないため、授業内容に合った出題形式をイメージしにくいのです。

そこで、様々なテスト方法による問題を示し、教員が実際に解くような研修を行ってみたいかがでしょうか。授業で扱うタスク(英語で自己紹介をするなど)をテストのタスクにする方法や、生徒がALTに質問をするという方法も、案外、自分1人では気づかないものです。

採点方式にも発想の転換が必要です。例えば、自由英作文を減点方式で採点しているケースがあります。長文になればなるほど間違いの数が多くなりますから、たくさん書いた方が不利になってしまいます。また、コミュニケーションの問題では正解は1つではないので、ループリック

などに照らし合わせて、正確さ、内容、構成などの観点別に配点した上で採点することも大切です。

研修では、テストを持参し、参加者同士で話し合うといった活動も有効です。授業を公開して参観者に意見をもって改善するのと同様に、テストも他者からの批判的な意見があつてこそ改善できるのだと思います。

CAN-DOリストを生かし評価の改善を図る

文部科学省の推奨もあり、多くの中学校でCAN-DOリストが作成されるようになりましたが、評価にはあまり活用されていないようです(図)。私が思うに、教育委員会から配布されたモデルを基に作成したために、実際の授業と結びつけて考えにくくなり、リストの内容と授業の整合性を考えたり、目標に到達するまでの指導のストーリーを描いたりしていないことが多いからでしょう。

CAN-DOリストを作成するのなら、同時に、現場が授業や評価を改善するツールとして有効に活用できるような支援もしてほしいと思います。例えば、リストの特定の項目について、卒業までにどうすれば到達できるのかを議論する研修を開いてみてください。到達の過程を考える中で、教育目標や授業について話し合う機会とするのです。先生方はCAN-DOリストの活用法をイメージでき、その重要性に気づくことでしょう。

そのようにして、CAN-DOリストを実質化していくことで、テストの内容もCAN-DOリストに即したものになっていくと思います。

根岸先生からの提言

1. 指導目標、授業、評価に整合性があるかを見直す。
2. 教科書の英文そのままではなく、到達目標に即した出題にする。
3. 出題形式のレポーターを増やし、CAN-DOリストを活用した評価を行えるような研修を開く。